

研究主題「運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる指導法の工夫

一体づくり運動における運動内容や学習過程の開発」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

世田谷区立桜丘小学校 主任教諭 小牧 来太

I 研究のねらい

1 研究主題設定の理由

中央教育審議会答申(平成20年1月)で、運動する子供とそうでない子供の二極化の傾向や、子供の体力の低下傾向が依然深刻な問題となっていると指摘されている。このことから、新学習指導要領では、体づくり運動を全学年で指導することとなった。

新学習指導要領の運動の内容では、低・中学年においては、発達の段階から体力を高めることを学習の直接の目的とすることは難しいが、将来の体力向上につなげていくためには、この時期に体の基本的な動きを身に付けることが重要であると示されている。

そこで本研究では、児童に運動することの楽しさを味わわせながら、体の基本的な動きを身に付けさせることで、生涯にわたって運動に親しむための資質や能力を育成する指導方法を研究開発していく。

2 研究仮説

「多様な動きをつくる運動」において、運動の行い方や体の基本的な動きを身に付けさせる学習過程を開発することにより、児童が運動に楽しんで取り組むことができ、生涯にわたって運動に親しむための資質や能力の基礎を育てることができるだろう。

II 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体力を高める運動」の運動内容の比較

低・中学年の「多様な動きをつくる運動(遊び)」と高学年の「体力を高める運動」の例示を比較すると、中学年は他の学年よりも友達と一緒にやる運動の例示が多い。(表1)

このことから、児童が友達と協力し、励まし合うことができる運動の行い方を、教員が提示していくことが、中学年では重要である。

表1 多様な動きをつくる運動(遊び)・体力を高める運動の例示(友達と行う運動の例示の抜粋)

低学年 多様な動きをつくる運動遊び		中学年 多様な動きをつくる運動		高学年 体力を高める運動	
る用具を操作する運動遊び	○長なわでの大波・小波をしたり、回っているなわをくぐり抜けたりすること。 ○友達と背中などでボールをはさんで、いろいろな方向に運ぶこと。	する用具を操作する運動	○相手に向かって輪を投げたり、投げられた輪を捕ったりすること。 ○長なわでの連続回旋跳びをすること。 ○友達に補助されながら竹馬や一輪車に乗ること。	る力強い動き及び動きを継続するための運動	○押し、寄りをういてすもうをすること。 ○二、三人組で互いに持ち上げる、運ぶなどの運動をすること。 ○短なわ、長なわを使って全身運動を続けること。
遊力試しの運動	○すもう遊びで相手を押し出したり、引き合い遊びで引き動かしたりすること。 ○友達をいろいろな方向に引きずったり、おんぶをしたりすること。	力試しの運動	○押し合いすもうで、重心を低くして相手を押ししたり、相手から押されないように踏ん張ったりすること。 ○重心を低くして相手を引っ張ること。 ○人数を変えて綱引きをすること。 ○友達をおんぶし、安定させながら運ぶこと。 ○手押し車など、両腕で自分の体重を支えながら移動すること。		

(2) 運動の資質や能力をはぐくむ学習の考え方

「運動に親しむ資質や能力」は、①運動への関心や自ら運動する意欲②仲間と仲よく運動すること③各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力④運動の技

能と示されている。(小学校学習指導要領解説体育編 平成20年8月)

中学年の体づくり運動では、体の基本的な動きを身に付ける(運動)、進んで取り組む(態度)、動きを選択・工夫する(思考・判断)という3つの要素が、運動の資質や能力の基礎となる。

この3つの要素を取り入れ、運動や友達とのかかわりを考えた学習過程を開発し、児童が楽しみながら、学習活動を展開していけるようにする必要がある。(図1)

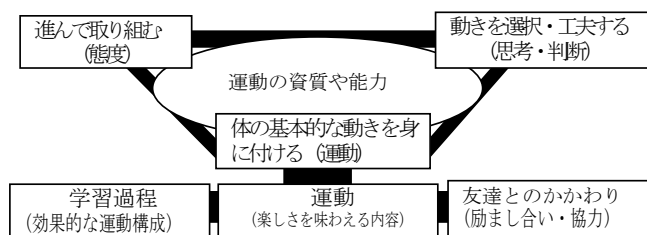


図1 運動の資質や能力をはぐくむ学習のイメージ

2 調査研究

平成21年7月に都内公立小学校第3学年から第6学年の児童558名、教員40名を対象に質問紙を用いて、体育の学習指導に関する意識調査を行った。

(1) 教員のアンケート調査結果から

小学校の教員は体づくり運動を指導する際、「運動内容の取り上げ方」また「単元構成の仕方」について、困難を感じている割合が高い。(図2)

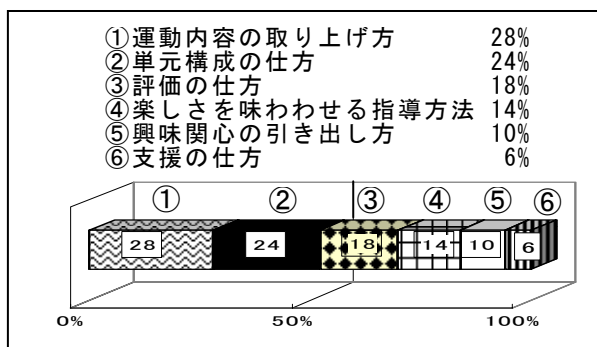


図2 体づくり運動を指導する際に困難を感じていることの調査結果

これはアンケートの意見欄によると、「例示のとおりに行うと楽しみに欠ける。」「例示の特性が分からないため、効果的な指導ができない。」「多くの運動をどのように組み合わせるとよいかわからない。」といったことが主な理由である。

そこで多様な動きをつくる運動で示された多くの例示を、どのように単元構成するのが、指導上の課題であると考えた。

(2) 児童のアンケート調査結果(中学年)から

中学年の児童が体育の学習で「期待していること」の調査結果は、「体力をつけたい」、「力いっぱい運動したい」「いろいろな動きができるようになりたい」「友達と楽しく運動したい」の割合が高い。(図3)

しかし、発達段階を考えると中学年の児童は、体力を高めることを学習の直接の目的とすることは難しい。むしろ、将来の体力向上につながるため、体の基本的な動きを培っていくことが重要であると考えた。

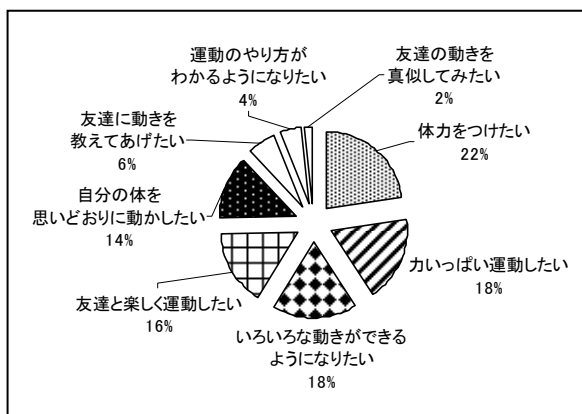


図3 体育の学習で「期待していること」の調査結果(中学年)

そこで児童が力いっぱい運動を行い、楽しさを味わっていくことができる学習過程の開発や、体の基本的な動きを身に付けることができ、友達と仲良く運動できる運動の行い方を開発していくことが、指導上の課題を改善する手だてとなると考えた。

3 開発研究

(1) 運動の楽しさを味わわせていく学習過程の開発

教員と児童の調査結果から、教員が児童に身に付けさせたい動きが分かりやすく、児童にとっては、楽しみながら運動に取り組むことができる学習過程を開発した。(表2)

これは多様な動きをつくる運動の例示を、児童が楽しみながら運動に取り組むことができるように、技に関する運動内容、勝敗に関する運動内容、記録に関する運動内容で分類した。また、技に関する運動内容は体のバランスをとる例示の運動、勝敗に関する運動内容は体を移動する運動と力試しの例示の運動、そして記録に関する運動内容は用具を操作する例示の運動を中心に組み立てるように整理した。さらに、整理した運動内容を3時間ごとに分けたことで、教員が児童に身に付けさせたい動きを明確にできるようにした。

表2 第4学年の13時間の学習過程

構成 段階	技に関する運動内容			勝敗に関する運動内容			記録に関する運動内容			技・勝敗・記録に関する運動内容
	1 知る	2 身に付ける	3 楽しむ	4 知る	5 身に付ける	6 楽しむ	7 知る	8 身に付ける	9 楽しむ	10 11・12・13 身に付ける・楽しむ
学習 内容	オリエンテーション	体のバランスをとる動き	動きを工夫・選択	力試しの動き	体を移動する動き	動きを工夫・選択	用具を操作する動き	動きを工夫・選択	勝敗に関する動き	技・記録に関する動き

(2) 自ら考えたり工夫したりする力を育てる運動の行い方の開発

学習過程を3つに分類したものを、それぞれ3時間ずつ行うこととし、その3時間の第1時で運動の行い方を知る「運動を知る時間」、第2時は運動の基本的な動きを身に付ける「運動を身に付ける時間」、第3時では身に付けた基本的な動きを基に、自分の課題に合った動きを選択したり、既習の学習から動きを考えたりする「運動を楽しむ時間」を設定した。(図4) これにより、多くの運動内容を、児童がより楽しむことができると考えた。

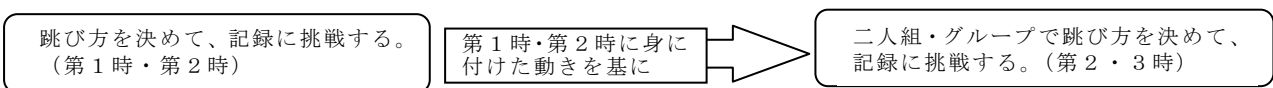


図4 なわとびを使った運動の工夫(例)

(3) 動きのポイントを明確にした学習資料の開発

「多様な動きをつくる運動」に示されている運動の例示について、体の基本的な動きを身に付けることができるように、児童の学習資料に動きのポイントを提示した。また動きのポイントを明確にすることで友達の良い動きを見付けることができるようにした。(図5)

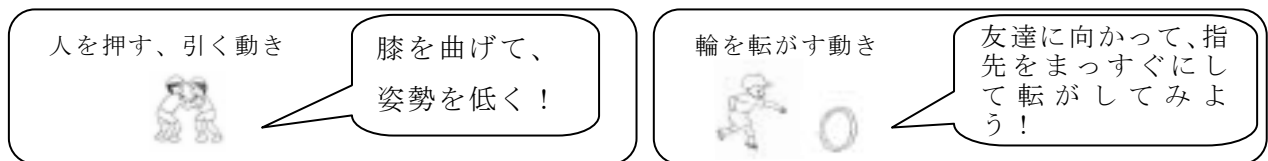


図5 力試しの運動と用具を操作する運動の動きのポイント(例)

III 研究の結果と考察

平成21年10月に都内公立小学校第4学年を対象に、「多様な動きをつくる運動」の授業を行い、開発した学習過程と運動の行い方の有効性について検証した。

1 体育学習における意欲の高まり

検証授業後、体育の授業を「楽しい」と思う児童は、83%から95%になった。また体づくり運動で楽しかった理由は、「試合に勝ったとき」や、「記録が伸びたとき」の割合が高い。(図6)

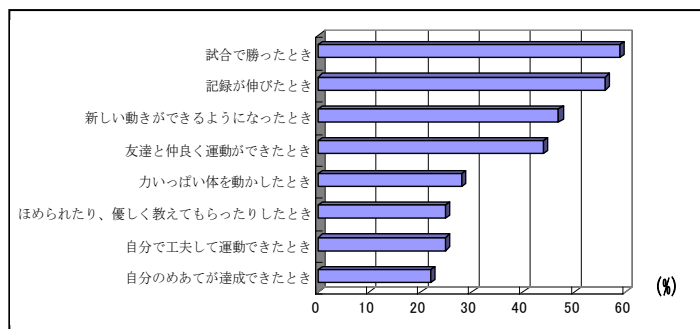


図6 体づくり運動で楽しかった理由の調査結果

この結果から、例示の運動を勝敗に関する運動内容や記録に関する運動内容で分類した学習過程を開発したことが、児童の運動に対する意欲を高めたと言える。

2 運動の行い方の開発による成果

児童が体づくり運動の学習で「できたこと」は、「友達と楽しく運動できた」が94%、「いろいろな動きができるようになった」は91%と回答している。(図7)

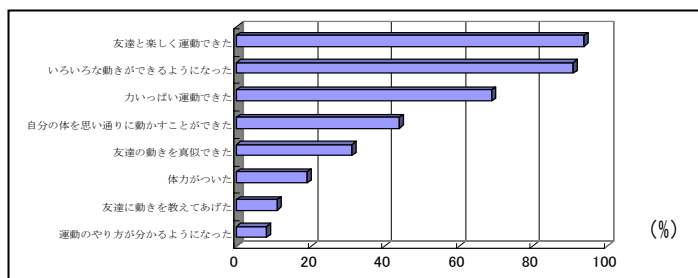


図7 体育の学習で「できたこと」の調査結果(中学年)

「友達と楽しく運動できた」と答えている児童の88%は、「二人で考えた跳び方を跳べたことが楽しかった」、「長なわを6人一緒に跳んだことが楽しかった」と、動きを考え工夫したことを、その理由として記述している。

このことから、運動の行い方を「運動を知る時間」「運動を身に付ける時間」「運動を楽しむ時間」としたことで、友達と動きの工夫ができ、運動をより楽しむことができたと考えられる。

3 児童の動きの変容

授業観察の中での評価の結果、記録に関する運動内容で行った用具を操作する動き、勝敗に関する運動内容で行った力試しの動きが、おおむねできた状態となった児童は78%以上だった。(図8)

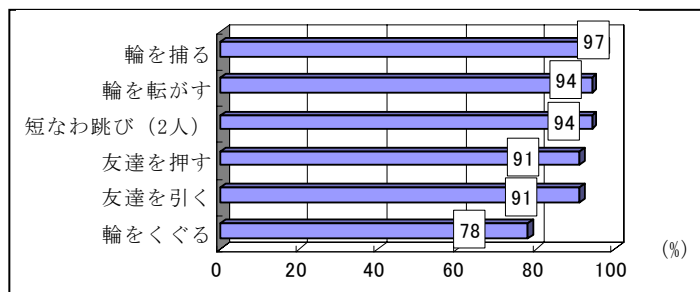


図8 検証授業で、おおむねできた児童の評価結果(教師の評価)

また児童が記入した学習カードに友達のよい動きのポイントを書いている割合は、89%だった。その内容は、「友達の真似をして低く押すことができた」、「友達の投げ方を真似して、まっすぐに転がすことができた」と書かれていた。このことから、動きのポイントを明確に示したことで、基本的な動きを身に付けられたとともに、友達のよい動きを見付け、取り入れることができたと考えられる。

IV 今後の課題

1 他の運動領域と関連した指導計画の作成

多様な動きをつくる運動を带状で時間をとり、中学年の他の運動領域と合わせて、学習できる学習過程の作成をしていく。

2 自ら考えたり工夫したりする運動の行い方のさらなる検証

本研究で検証した運動内容以外で、児童が動きを選択する運動内容や動きを考え工夫する運動をさらに開発することで、効果的な指導方法を考察していく。

「運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる指導法の工夫
— 一体づくり運動における運動内容や学習過程の開発 —」